

赤い痣

野村胡堂

一

江戸名物の御用聞銭形の平次が、後にも前にもこんなひどい目に逢ったことがないという話。

「親分、変な強盗おしこみが流行はやるそうですね」

「それだよ、八。笹野の旦那にも呼びつけられて、散々油を絞しぼられたんだが、十手捕縄を預ってから、俺はこんな馬鹿な目に逢ったことはねえ」

「笹野の旦那まで、親分が泥棒だと仰しやるんですか。畜生ッ」
「これこれ何を言うんだ、——笹野の旦那はあの通り分った方だ。まさかこの平次が強盗をやるうと思つていらつしやるわけじゃないが、何分世間の噂がうるさい。早く捕^{つか}まえて正体を見せるよ
うにと——こういう話だ」

平次が悄^{しよげ}気返るのも無理はありません。一と月ばかり前から、江戸中を荒し廻る恐ろしい強盗^{おしこみ}、時には女もさらえば、人も害^{あや}める兇悪無慙^{きようあくむざん}なのが、——銭形平次らしい——という噂が立ったのです。

別段、『俺は銭形平次——』と名乗るわけではありませんが、物

腰から背恰好せいかっこう、声の調子、ちよいとした癖まで、妙に平次に似ているのと、時々平次でなければならぬ事をするので、噂が次第に根強い疑いになり、遂には長い間に築き上げた平次の人気と名声も、これが動機で一ぺんに叩き潰たたつぶされてしまいそうにさえ見えるのでした。

「親分、引っ込んで居ちや、世間の疑いが晴れっこはありません。縄張なんかにこだわらずに、荒した跡を一目見て廻ったらどんなものでしょう」

「成程、それも思いつきだろう。変な顔をされるのを覚悟かくごで、一軒一軒風潰しらみつぶしに当って見るとしようか」

平次は早速その作戦に取りかかりました。一番最初に行つたのは神谷町の酒屋伊勢徳いせとく、この辺は柴井町の友次郎の縄張ですが、平次一期の浮沈ふちんに拘かかわること、日頃仲の悪い友次郎の思惑などを考えちゃいられません。

「御免よ」

「あッ、銭形の親分さん」

番頭は真っ蒼になりました。不意に幽霊でも見たような心持だつたのでしよう。

「私を知っていなさるのかえ」

「へえ——」

「強盗に入られた時の様子を詳しく聞きたいが」

平次はさり気ない顔で帳場格子の前に腰をおろしました。

「どうぞ、奥へお通り下さい、店じゃ——」

「商売に障さわるといふのか、八、それじゃ暫らくお邪魔をさせて貰おうか」

番頭に案内されて奥に通ると、主人の徳七は、それでも機嫌よく迎えてくれました。

「銭形の親分さん、御苦労様で」

「御主人は私を知っていなさるだろうね」

「へエ、よく存じております」

「強盗おしこみの入った日のことを復習おさらいして貰もらいたいが」

平次とガラツ八は、煙草盆へだを隔へだてて、近々と主人の徳七と相對しました。五十二三の名前の通り福德円満な顔です。

「丁度一と月ばかり前のことで御座います。御上の御用だからと言ことつて、子刻過ここのつぎに表戸を小僧に開けさして入いつて来た者が御座います。臆病窓おくびようまどから見た時は顔を出でしていたそうですが、中へ入ると頬被ほおかむりをしておりました。いきなり十手を出でして小僧に喰くらわ

せると、奥へ案内させて、寝ねていた私あしげを足蹴あしげにして起たし、その日の売溜うりだめと、それから少しばかりの払いの用意よういに取とつて置おいた金かねを持もつて行いかれました。いえ、金はほんの十両ばかりで御座います

が、手代の惣吉が飛出して御近所の方を呼んで来ようとする、後ろから呼止めて、振り返ったところへ、今盗ったばかりの売溜の中の、錢を一枚投げられて、左の眼を潰つぶされてしまいました。可哀相に、まだ源助町の眼医者に通っておりますが、生れも付かぬ不具かたわになりそうで御座います」

「それは氣の毒だ」

平次もこう言うより外はありません。そこへ番頭は怪我人の惣吉を伴つれて来て、左の眼を巻いた白布を取って見せました。腫はれは引きましたが、眼の玉は痛々しく潰つぶれて、物の役に立とうとも思われません。二十三四の惜しい男振りです。

「こんなひどい目に逢わされました。親分さん、どうぞ、仇を取ってやって下さいまし」

そう言う惣吉の顔に、皮肉な表情のあるのを、見のがすような平次ではなかったのです。

「その強盗が、私に似ていたそうだね」
おしこみ

「へエ——」

と惣吉。

「これこれ、失礼なことを申上げては——」

主人の徳七はあわてて止めましたが、

「背の恰好、反り身になる時の具合、お言葉の様子、そっくりと

申したい程で御座いますよ」

眼一つ潰つぶされた怨うらみのせいか、惣吉は齒きぬに衣を着せません。

「その上、十手を持って歩いて、投げ銭まで器用では、本人の俺あつしが見ても疑いたくなるだろう。まあいい、そのうちに尻尾を掴んで、仇を取ってやる折もあるう」

平次はそんな事を言つて、そこそこに引揚げました。

憂鬱ゆううつな四月空うづきぞら、桜は散りましたが、梅雨つゆ前の気圧が、妙に人間の心を灰色に沈ませます。

「親分、次は」

「車坂くるまざかの質屋だ」

五軒目が桔梗屋喜兵衛きぎょうや。ここでは偽平次、一家残らず縛り上げて、有金百両余りと、少し浮気っぽいと言う評判はあつたが、下谷一番と言われた小町娘のお藤ふじをさらって行つたのです。

「ツイ十日ほど前の晩で御座いました。寅刻ななつ近い頃、どこから

入つたとも判らぬ男が、店中の者を一人ずつ縛り上げた上、百両ばかりの金ようだんすを用筆筒ようだんすから出させ、娘さるぐつわに猿轡さるぐつわを噛ませて、裏口から飛出してしまいました。あんまり手際が良いので、忍術使いか何

かじやあるまいかと申しております」

主人の喜兵衛は四十男ですが、如何にもがっかりした様子で説明してくれず。

「お藤さんの行方は？」
ゆくえ

と平次。

「それつきり判りません。三輪みのわの万七親分は、店中の者を一人残らず縛った手際は、捕縄とりなわを扱い馴れた者の仕業だ——と仰しいましたが」

「——」

ここにも平次に対する濃厚な疑い、——さすがにはつきりは言

いませんが、主人の眼には疑惑が満ちます。

「つかない事を訊くようだが、——お藤さんに親したしい男でもなかつたろうか」

「世間ではいろいろ噂があつたようですが、取立てて親しい男があつたとは存じません。もつとも、近いうちに、湯島の山崎屋専助へ嫁よめにやる筈で、祝言の日取りまで決めておりました。金は惜おしいと思いませんが、せめて娘だけでも無事に帰るように、お骨折りを願います。親分さん」

聞きようによつてこれは、お前の手から娘を返せとも取れます。「お藤さんが、その婿むこを嫌っているような様子はなかつたろうか」

「へエ——、あんまり好きではなかつたようで御座います」

これ以上に訊く事ありません。三輪の方七が調べ上げて、店中の者を縛つたのは、捕縄を扱つたことのある者と言うなら、それも信用して差支えのないことでしょう。

「八、娘にはきつと男があつたと思う。お前の鼻で嗅かぎ出しちやくれまいか」

「ようがすとも親分、そんなことは朝飯前で」

八五郎は平次と別れて、どこともなく飛んで行きました。

それから二三軒当って、神田へ帰つたのは夕方、さすがの平次もがっかりして、物静かにいたわつてくれる、若い女房のお静に

も口を利こうともしません。

投げ銭、十手、捕縄のさばき、声から、身体の恰好まで、銭形の平次によく似たと言う強盗は、一と月の間に、江戸中を八カ所も荒しておりました。それが皆な浅草下谷に集中して、芝に一軒、小石川に一軒ありますが、悉く平次の縄張を除けているのも不思議です。

その中で、怪我人が三人、誘拐が一人、奪られた金は五百両あまり。何しろ意地が悪くて、賢くて、残酷で、敏捷で、手のつけようのない曲者です。

「ね、お前さん、どうかなすって？」

お静は一本銅壺どうこに落しながら、平次の顔をそつと覗きました。一緒にくつたくなつてからこんな屈托した顔を一度も見せたことのない夫だったのです。

いい加減世帯馴れた筈のお静ですが、初々しさは何時までもこぼれて、何か言われたら、そのまま、笑いも泣きもしそうな、明けっ放しな表情の可愛らしさは、物思いがなかったら、引寄せたくなるでしょう。

「お上の御用には口を出さない方がいいよ」

「でも」

「この平次が強盗おしこみか強盗でないか、お前はよく知っている筈だ。

安心しているがいい」

優しく言われると、ツイ涙ぐむお静だったのです。

三

「判りましたぜ、親分」

「八か？」

平次が顔を挙げたところへ、ガラツ八の八五郎は、りょうけん 獵犬のよう
に飛込んで来ました。

「あれは大変な娘だ。噂の立った男だけでも三人や五人じゃあり

ません」

「そうだろう」

「それが皆んな強盗位はやり兼ねない人間ばかりだから不思議じゃありませんか」

「何だと、八？」

「最初にお藤と噂のあった下廻り役者の中山半七郎。こいつはちよいと好い男で、横顔と後ろ姿は銭形の親分そっくりだ」

「馬鹿野郎」

「それから、かるわざ軽業の芸人で、両国の小屋にいる古川一座の甚三郎。

こいつはきよくまり曲ま毬りの名人で、投げ銭位はやり兼ねねえ」

「――」

「もう一人は、三輪の万七親分のところにいる、お神楽かぐらの清吉」

「えっ」

「これなら捕縄のさばきはお手のものだ」

「それだけか」

「神谷町の伊勢徳いせとくの手代――あの眼を潰つぶされた惣吉も、一年前まで浅草の出店にいて、お藤と変な評判が立ったそうですよ」

「フーム」

「とにかく、あの娘の情夫いろおとしは皆んな怪しいと思って間違いはありませんよ、大変な娘があったもので」

「それで大方眼鼻が付いた。八、もう贖物にせものなんかには負けないつもりだよ」

「親分、しっかりやっておくんないさ」

ガラツ八は大はしゃぎですが、平次はまだ深々と拱こまぬいた腕を解こうともしません。

「それにしても、不思議なことが二つ三つあるんだ」と平次。

「どんな事で、親分」

「強盗おしこみの入る晩は、きつと俺がどこかへ行った時だ。——言い訳の出来ないように仕組むのが一つさ」

「それから」

「俺の縄張うちへは足を踏み入れないのも不思議だ」

「親分が怖いんで、お膝元へは乗込めないのでしょうよ」

「そんな筈はない」

「だがね、親分。あ、あ、あ、しにも腑ふに落ちない事が一つあるんだが」
ガラッ八も高慢らしく腕を拱こまぬきます。

「何だ、言ってみろ。——あんまりお前の腑ふに落ちた物事なんて
えのはあるまい」

平次は始めて莞爾にっこりとしました。

「親分と八五郎は、影と形、太夫と三味線、切っても切れない親

分子分でしよう」

「それがどうした」

「銭形の親分の偽物があつて、八五郎の偽物が出て来ないのが不思議でならねえ」

「何だ、馬鹿馬鹿しい。そんな長ンがい面つらの偽物なんか出来合ひにあるものか、ハツハツハツ」

平次は到頭笑い出しました。が、気がついて見ると、そう言つたガラツ八は、お付合ひに笑いながらも、妙に涙ぐんでいたので、す。こんな事でも言つて、この一と月あまり笑顔を見せなかつた、親分の平次を笑わせるつもりだつたのでしよう。

「へッ、へッ、へッ、へッ」

全く、そう言ったガラツ八自身は、止めどもなく笑っているの
でした。

赤い痣



©2017 萩 柚月

四

その晩、偽平次の強盜は、湯島の山崎屋に入りました。湯島は平次の縄張ですから、昨夜八五郎に『俺の縄張を荒さないのが不思議』と言ったことを思い出して、さすがの平次もギョツとした心持でした。

山崎屋の専助というのは、言うまでもなく桔梗屋ぎぎようやのお藤が嫁に行く筈だった家で、商売という程のことはありませんが、二三年前から店を持って、中どころの商人や、御家人安旗本などを相手

に金を廻し、小体こていながらなかなか裕福に暮しておりました。

「これは銭形の親分さん、御苦労様で——」

平次を迎えたのは、若主人の専助。まだほんの二十二三の男ですが、気風も身体もしつかりした桔梗屋が娘の婿にと望んだだけに、何となく頼母たのもし気な青年でした。

「飛んだ災難だったそうだね」

「有難う御座います。まだ宵のうちで、私は留守で御座いました。

御勝手から入って、下女のお滝を案内に、隠居所に休んでいる父親の専左衛門を脅おどかしたそうで御座いますが、父親は永わづらの患いで、心持が本場で御座いません。泥棒は父親の部屋から手文庫だけを

持出して、庭で錠前を打ち割って、中にあつた七八両の金を持って逃げたそうで御座います。——いえ、金は大した事は御座いませんが、帰って行く時、庭の松に引掛つて、うっかり頬被りがほおかむ除れたとそうで、お滝は泥棒の顔をよく見たと申します」

「えつ、それは真当かほんとう」

平次よりも八五郎の方が驚喜しました。

「すると、泥棒の方でもびっくりして、いきなり下女の顔へ手文庫の中の金を叩き付けたそうで、可哀相に若い娘が額をひたいやられております。私が帰つて来なかつたら、引返して下女の命を取る気になつたかもわかりませんが、泥棒が裏木戸から逃出すと一緒に、

私が外から帰ったので、幸い何事も御座いませんでした」

「お前さんは、どこへ行きなすったんだ」

と平次。

「車坂の桔梗屋へ参りました。夕方までに帰るつもりでしたが、無理に引止められて、晩の御馳走になりましたので、家へ帰ったのは、戌刻^{いっく}少し前で御座いましたか——」

専助の言うのは非常によく筋が通ります。

「お滝とやらに逢ってみたいが」

「へエ——」

専助に呼出された下女のお滝は、房州生れの十八、世間並のよ

く肥った娘でした。投げ銭で額を割られて、少し大袈裟な繃帯おおげさはほうたいしておりませんが、根が丈夫そうで、大した屈托くつたくもなく働いている様子です。

「お前は、泥棒の顔を見たそうだが、どんな人相をしていたえ」と平次。

「若い、好い男で御座いましたよ」

「俺に少しは似ていたか」

「声と顔立は似ているようですが、まるつきり違いますよ。泥棒は左の頬に大きな赤痣あかあざがありますよ」

「何？ 左の頬に、大きな赤痣、——よっぽど大きいか」

「掌てのひらの半分ほどもあるでしょう。一度見たら、どんな人ごみの中
でも判ります。火のように真つ赤な痣あざですもの」

「フーム」

偽平次、姿も声も顔も似たという泥棒の、頬被りで包んだ左の
半面に、掌の半分ほどの大痣おおあざがあるとは、何と言う事でしょう。

「親分、有難い、明りが立ったッ」

ガラッ八は思わず飛上がりました。真物の銭形平次の頬には、
左にも右にも、鶉うの毛ほどの汚点しみもありません。

「大丈夫間違いはあるまいな」

と平次。

「お勝手から射す灯でよく見えたんですもの、間違いなんかありません。それを見られたのが口惜しくて、こんな目に逢わせたんですもの。裏口へ人のあしおと躑音が聞えなかつたら、私は殺されたかも判りませんよ」

お滝は思いの外しつかりした娘でした。

「お前は何時頃からここへ奉公しているんだ
と平次。

「半年になります」

お滝の思わぬ手柄を聞いて、平次は妙に沈んでしまいます。

「親分、いい塩梅じゃありませんか」

ガラツ八は又それが不足でならなかつたのです。

五

離れの隠居部屋に居る父親の専左衛門は、六十を越した老人で、何を聞いても応答うけこたえの出来ないほど老耄もうろくしておりました。それに、悪い病気で身体も動かず、毛も抜け、顔も半分崩れて、見る影もありません。

この年寄の浅ましい姿を見せるのは、伴の専助にはかなりの苦痛だったらしく、平次と八五郎が母屋おもやへ引揚げたときはホツとし

た様子で——それでも引返して、蒲団を直したり、用事を訊ねたり、何かと親切にしている様子でした。

若いに似合わず金儲は上手で、町内でも評判の専助ですが、平次が見たところや、八五郎が聞嚙つたところでは、見掛けに似合わぬ飛んだ孝行者だということでした。

「親分、いよいよ汚名おめいがそそがれましたね。泥棒の左頬に、火のような赤痣あかあざがあると聞いた時は、思わず声が出ましたぜ。嬉しさがこみ上げるてえのはあの事だね」

ガラツ八の言葉を空耳そらみみに聞いて、平次は、

「いよいよこの強盗おしこみは桔梗屋きぎょうやのお藤と引っかかりのある者に

決った。お前が聞込んだ筋を一つ一つ手繰たぐって見よう」

「役者の中山半七郎は、小屋が休みでとぐろを巻いていますぜ」

みせんぼり

三味線堀の裏長屋ながら、八五郎が案内したのは芸人の住居ら

しく磨みがかれた家でした。

「御免よ、親方はいなさるか」

「あッ、銭形の親分さん、——どうぞ」

半七郎はアタフタと二人を迎え入れました。少し自墮落じだらくな風俗

ですが、役者らしく白粉焦おしろいやけのした顔や、スラリとした後ろ姿が、

平次に似ないことはありません。

「私を知っていなさるか」

「銭形の親分さん知らない者はありません」

「お世辞ものだね、親方」

「親方と仰しやるのは御勘弁を願います。私はまだ本当に馬の脚あしで——」

中山半七郎は頸筋くびすじを搔きました。平次の調子が少し皮肉に聞えたのでしよう。

「俺と親方が似ているんだってね、世間の人はその言うが——」
「へエ——」

「もつとも、役者に似ていれば、俺は本望だが、親方の方じゃ迷惑まどろだろう」

「飛んでもない、親分さん」

半七郎は益々恐縮してしまいました。通な人達からは鱒このしろの腹と
言われるピカピカの一ちようら張羅、それを寝押して夜昼オツ通して着て
いるらしく、部屋の中の調度も、田舎芝居の小道屋のようで、何
となくケバケバしく見えます。

「お前さん、桔梗屋ききようやのお藤を知っているだろうね」

「へエ——」

「どんな掛り合いだえ」

「以前、御ひいきになりましたが、近頃は一向御目にかかりませ
ん」

「何か、固い約束でもした事はないだろうか」

「飛んでもない、芝居者と客の間で、——」

「約束はしても当てにはならないというのだろうね」

と平次。

「恐れ入ります、素人衆はツイ夢中になりますんで、へエ、飛んだ迷惑をいたします」

おしろいやけ

鼻の下の長い白粉焦おしろいやけのした男が、こんな事を言うのですから、本当にいい気なものです。

「で、今は掛り合いがないと言うんだね」

「もう三月もお目にかかりません、——近頃世間の評判では、強おし

盗こみにさらわれたという話で、飛んだ事で御座います」

「その疑いが親方にも懸かかっているのだよ」

平次はズバリと言って退のけました。

「ジョ、御冗談で、親分さん。私は素人衆の女なんかは、飽あきあき々々しております。そ、そんな馬鹿なことがあるわけは御座いません。第一この通りの狭い家で、お嬢さんをさらったところで隠して置く場所もない有様で」

半七郎は蒼くなつてしまいました。こんな疑いを掛けられてはたまらぬと思つたのでしよう。急に恐ろしい達弁になつて、ベラしゃべと喋舌ります。

「お藤は、お前さんをどう思っていたんだ」

「それが、その、あんな気の知れないお嬢さんはありません。舞台姿を見てやいのやいの言った癖くせに、半年も経たないうちに厭気がさしたようで、どんなに呼出しをかけても、二度とここへはいらっしゃいません」

六

平次とガラツ八は、その足を両国に伸のして、古川一座の軽業手かるわざて品しなを見物しておりました。お藤の關係した甚三郎というのは、曲きよく

毬まりの名人で、綱渡り、玉乗り、なんでも一と通りはいける、一座の花形です。

年の頃二十七八、青髯あおひげの跡の凄まじい、こんな社会によくある精悍せいかんな顔をした男で、如何にも浮気なお藤に注目されそうな人間でした。

一とわたり芸を見て、楽屋がくやへ入ると、

「銭形の親分さん、先刻さつきからいらつしやることは存じておりました。わざわざこんな小屋へ御運びで、有難う存じます」

甚三郎、なかなかのしっかり者らしい男です。

「早速聞きたいが、車坂ききょうやの桔梗屋のお藤——」

「へエ——」

甚三郎の顔色は動きました。

「あれを知ってるだろうな」

「存じております。家出をなすったそうで」

「家出じゃない、さらわれたのだよ」

「——」

「知っている事は皆んな言って貰いたいが」

平次の言葉は穏かですが、隙もなく切り込んで行く名剣士の切きつ

尖さきのような鋭さがあります。

「世間ではいろいろの事を申しませんが、私とは身分違いで、別に

御懇意ごこんいを願ったわけじゃ御座ございません。一年ばかり前から御ひいきにして下すつて、楽屋へいろいろの物を下さいましたが、近頃はお神楽かぐらの親分さんと仲が良いとか言う評判で、ここへはお顔を
見せちゃ下さいません。そんな事は小屋の者が皆んな知っております」

「そうか、——お前の方では、あのお嬢さんをどう思っているんだ」

と平次。

「何と思ったところで、大家のお嬢さんと軽業の小屋にいる私とでは——」

甚三郎の眼は悲しそうでしたが、それは、境遇から来る一種メランコリイの悲哀で、この男の心の底には、したたかな魂の宿っていることを平次は見逃すわけはありません。

間もなく平次はガラツ八と一緒に引揚げました。

「親分、あの甚三郎が怪しくはありませんか、喰えねえ男のようですが」

とガラツ八。

「いや、あれは身分違いに腹を立てているんだ。あの男の曲きよくまり毬の腕は大したものだが、人間もしっかりしているよ。中山半七郎とは大変な違いだ」

平次は相変らず深々と考え込んでおります。

「残るのはお神楽の清吉だ、行って見ましようか、親分」

昌平橋近くへ来ると、平次はこんな事を言います。

「三輪の万七兄哥あにいの家へか」

「へエ」

「馬鹿野郎、清吉は下引きしたつびだが、万七兄哥あにいの右の腕だ。まさか俺が出かけて、調べるわけにも行くめえ」

全く平次の言う通りです。お藤と何かの噂があったにしても、岡っ引仲間で、調べも訊きも出来るわけはなかったのです。

「だって、親分、この上怪しいのは、清吉だけじゃありませんか」

「何をつまらねえ」

二人は何時の間にもやら平次の家へ帰っておりました。

七

偽平次の強盗には、左の頬に赤い痣あざがある——ということは、その日のうちに江戸中に知れ渡りました。

お蔭で平次の疑いは晴れましたが、その代り左の頬に痣のある男は、年寄りも若いのも、金持も貧乏人も、橋の袂たもとにいる乞食こじきまでが、一と通り疑われたり、調べられたりしました。

「親分、赤い痣のある男が向柳原の煎餅屋せんべいやにいますぜ」

「馬鹿、あれは右の頬だ」

ガラツ八はこんな事を言つて叱られております。

「神田から日本橋へかけて、少し赤い痣を探しましょう、親分」

「馬鹿だな、そんなに赤い痣が好きなら、手前一人で勝手に捜すがいい」

「今日は馬鹿が流行はやるぜ、親分」

「馬鹿」

これでは手の付けようもありません。

「俺は両国へ行って来るよ、甚三郎の曲毬きよくまりは暇ツつぶしには悪く

ないぜ。少し遅くなるかも知れないが、手前は、赤い痣でも捜して歩くがいい」

平次が出かけたのは申刻過ぎななつ。

その晩又大事件が起りました。三味線堀の中山半七郎が、風呂の帰りを路地の中で襲われ、自分の手拭で縊くびり殺された上、家中は滅茶滅茶に荒されていたのです。

宵のうちのことで、手拭で頬被りをした男が、人待ち顔に物陰に立っていたのを見た者もあり、半七郎と何やら言い争っている声を聞いた者もあります。

いろいろの噂を総合そうごうすると、それは、銭形平次そっくりの姿と、

その声です。

曲者は例の偽平次に紛れもありません。死体の側には、もう一と筋乾いた手拭が落ちておりました。町役人見廻り同心が駆けつけて、明るいところへ行つて見ると、手拭は神田台所町の酒屋で配ったもので、頬被をして、丁度頬の当るあたりへ、赤い無二膏をベツトリ塗った、掌の半分ほどの巾が附いていたのです。これを少し温めて頬に貼つたとしたら、夜眼遠眼には、赤い痣と見えない筈はありません。

「これだッ」

町役人も、見廻り同心も、町内の下っ引も顔を見合せました。

意地の悪いことに、そこへ来合せたのは、三輪の万七とお神楽かぐらの清吉です。

「赤い痣が偽物だとすると、こいつは可笑おかしなことになるね、親分」

多少でも疑いを掛けられた清吉は好い心持そうです。

「待て待て、殺されたのは下廻りの役者だ。銭形の兄哥とは縁がなさ過ぎるぜ」

三輪の万七はさすがに常識があります。

「半七郎はこんなだらしない人間だが、思いの外金を持っていたよ。女から絞ることが名人で——」

清吉の言葉は、近所の衆に裏書されました。ベラベラのあわせの袷を着て、見る影もない調度の中に住んでいくせに、半七郎は不思議に小金を溜めている様子だったのです。

「それじゃ手前がてめえ一番怪しい事になるぜ、清吉」
「冗、冗談でしょう、怪しいのはやはり銭形だ」

お神楽の清吉は大きい声でこう言いました。明日は江戸中に、強盗はやはり銭形という噂が一パイに拡がるでしょう。

八

「親分、しゃみせんぼり三味線堀の馬の脚が殺されたんですとさ」

と八五郎。

「そうだろう」

平次は驚く色もありません。

「あれッ、知っているんですかえ」

「いや、そんな事だろうと思ったよ、——ところで、昨日出がけに、お前へ頼んだが、暗くなつてからこの路地を出た者は誰と誰だい」

「誰も出ませんよ。隣の按摩あんまが出て行ったきりで——笛の音が聞えましたよ」

「何時だ」

と平次。

「いっつ戌刻かな」

「帰ったのは」

「いっつはん戌刻半でしたよ」

「路地の中から笛を吹いて出るのは可笑しいな、八」

「あっしは按摩は嫌いで」

ガラツ八は鼻の頭を撫でます。

「俺も呼んだことはない」

「たった半刻で帰ったのも変だね、時々そんな事があるようだが」

「八、それだよ、——お前めえ済まないがああの按摩あんまを呼んで来てくれ。

親分が腰が痛むそうだから、ちよいと揉もんで下さいって」

「腰が痛むんですか、親分は？」

「何でもいいよ、腰が気に入らなきア臍へそが痛いとか何とか言え、

——それから、按摩あんまがこの家へ入ったら、その隙すきをねらって、あ

の家のお勝手から入るんだ。二階の物干ものほしは丁度この家の庭の上だ、

話が聞えるか聞えないか、耳を澄すましているがいい——」

「そんな事をして構まいませんか、親分」

「いいよ、俺が引受けるから、——それからいい加減のところまで、

火事だ、火事だって吠ど鳴なるんだ」

「親分、そんな事が——」

「いってことよ、人が集まったら俺があやまってやるから」
手順がすっかり決まりました。

間もなくやって来た按摩、一人者で薄眼が見えるようですが、恐ろしく感の悪い男で、あらゆる物に躓つまずいて歩きます。

「こつちだよ、按摩さん」

「へエへエ、親分さん、御近所に住んでいながら、ろくに挨拶もいたしません、——今日は又有難う御座いました。私は、自分で言うのも変ですが、まことに按摩が下手へたで、——もつともまだ修業中で御座いますが、お気に召すような事は出来ません。へエへ

エ」

五十前後、俄にわか按摩らしく、成程念入りの下手です。

「お前さん、そんな不自由な眼で、よく一人でいなさるんだね」

「姪めいが時々手伝いに来てくれます。それに、冷飯みそに味噌なを嘗めて

暮すような身分で、たいした不自由も御座いません」

四方よもやま話をしながら、それでも腰から足へと揉もんでいると、

「火事だ、火事だッ」

ガラッ八の声は隣から筒抜けます。

「按摩あんまさん、お前さんのところらしいよ」

と平次。

「そ、それは大変ッ」

按摩は這い出しました。柱に鉢合せをしたり、土間に転げたり、自分の家まで行く騒ぎというものはありません。

「按摩さん、火はもう消えたよ。お前さん火の用心が悪いから、七輪りんの側の渋団扇しぶうちわが燃え出したんだよ」

ガラッ八は外から入って来ました。

「へエ——、七輪の火なんかない筈ですが」
と按摩。

「私が飛込んで消してやったよ」

「有難う御座います」

按摩は面喰めんくらつて帰って行きました。

「親分、ここの話は按摩の家の物干にいとよく聞えますよ」

「シッ」

「それから、親分」

と声をひそめるガラツ八。

「解ったよ、按摩の家から、女が一人飛出したろう」

「よく御存じで」

「その鼠ねずみを追い出したかったんだ。それが出ないうちは証拠が揃

わねえ」

平次は始めて晴々しい顔になりました。

九

中山半七郎殺しの疑いで、両国の軽業小屋から、三輪の万七が曲毬きよくまりの甚三郎を挙げたのは、その翌る日の昼頃でした。

と同時に、車坂の桔梗屋ききょうやからは、娘のお藤が無事に帰って来たと言う知らせが、三輪の万七と銭形の平次のところへありました。

「さア分らねえ」

八五郎は長い顎あごを切りしきに撫で廻していると、

「八——、大分前の事だが、花川戸はなかわどの近江屋の娘が、轟権三とどろきいんざとい

う香具師やしに誘拐かどわかされ、幽霊の見世物にされて殺されかけた事があつたが、覚えているだろうな」(第一卷『幽霊にされた女』参照)

平次は妙な事を言い出します。

「あの時捕つかまった一味のうち、轟権三と人相見かんそういんの観相院が牢破りをして逃げ出した」

「――」

「その観相院が、隣りの按摩あんまそっくりだとは思わないか」

「あッ、眼が潰つぶれていたから気がつかなかった。成程そう言えば、あの野郎だ、しょつ引いて来ましようか」

「待て待て、観相院は雑魚だ、それよりも大物を縛らせてやる」
平次がガラッ八を伴れて車坂の桔梗屋へ行つたのはもう夕方。
「親分さん、娘は戻つて参りましたが、何を聞いても口を噤んで
一と言も申しません」

父親の喜兵衛は狐につままれたような顔をしております。

「ちよいと逢つて見たいが——」

平次は奥へ通りました。

お藤はたいしたやつれもなく、母親に何かと口説かれておりますが、美しい顔を俯向けて田螺の如く唇を閉じている様子です。
少し浮気っぽいにしても、全く抜群の美しさ、下谷小町と言わ

れたのも決して嘘ではありません。

「お藤さん、——帰って来なすったそうだね、まア、いい塩梅だ。あんばい」
今度は文句なしに、湯島の山崎屋へ嫁に行きなさるだろう?」

「——」

お藤はそう言われると、サツと顔色を変えて、激はげしく頭を振り
ました。

「八、帰ろうか」

それつきり外に出た平次。

「帰るんですか、親分」

物足りない八五郎の耳へ、

「八、今晚は命がけだよ」

そつと囁くのでした。

そこから湯島まで一と走り、山崎屋の裏口へガラッ八を立たせた平次は、

「ここで見張っているがいい、誰でも構わないから飛出したら組み伏せろ」

そう言いおわると平次は、静かに、落着き払って表口から入って行きました。

「今晚は」

「おや、銭形の親分さん」

帳場へ迎えた専助の顔には、何の蟠わだかまりもありません。

「お藤は無事に帰りましたよ」

「へエ——、それはいい塩梅で」

「そして、何もかも打ち明けたぜ」

「えッ」

「御用ッ」

平次が飛びかかるのと、専助が算盤そろばんを取って身構えるのと一緒でした。

恐ろしい格闘が始まりました。二人の手から互いに投げ出される銭、銭、銭——。

平次も幾つか顔へ叩き付けられました。手練しゅれんの違いで、専助はとうとう力尽きて平次の膝の下に組伏せられます。

その時、裏口へよぼよぼと逃出した物の影のような怪しい男。

「御用ッ」

ガラッ八はやり過して無手むずと組付きました。

×

×

「親分、解らねえことばかりだ、絵解きをしておくんない」

山崎屋の専助、専左衛門親子を番所に引渡した帰り、ガラッ八は平次の浮かぬ顔を覗きました。

「父親の専左衛門は、轟権三とんこうきんざんの成れの果さ。俺に捕まったのが破

滅で、一度は獄門台に上ろうとしたのを怨みに思い、倅の専助を仕込んで、あんな芝居を打ったんだよ」

「専助は親分に少しも似ないが」

「それが術てだ、平常ふだん少しも似ない専助が、身扮みなりから声まで俺に似るのは、修業のせいもあるが、専助は親父の小屋で、物真似ものまねをして客を呼んでいたことがあるんだよ」

「成な——る」

「投げ銭もあれだけ器用になるには、骨を折って稽古した事だろ。お藤などにかかり合いが出来なきやア、何時までも銭形の平次が強盗おしこみすると世間に思わせたかも知れない。危ない事だ。もう

少して俺も破滅だったよ」

「——」

「お藤に迷って、金の力で婿むこになる話を進めたのはよかったが、どたん場になってお藤が頭をふるるので、お藤と噂のあった人間を怨んだ。惣吉はそれで左眼を潰つぶされたのさ」

「お藤をさらったわけは」

きよくまり

「あれは変った娘だ。役者の舞台姿に迷ったり、曲毬きよくまりの軽業師や、

あきんど

岡っ引の清吉に打ち込むと言った気性だから、堅気の商人あきんどが嫌い

だったのさ。専助にさらわれて、妙に専助たのが頼もしくなったんだ

ね、——隣りの按摩あんまのところかくに匿されて十日もじっとしていたの

は、専助が怖いせいもあつたが、一つは、専助を見直す心持になつたんだらう」

「それじゃ、半七郎を殺したのは？」

「やはり専助さ。自分へ心が傾きながらも、お藤はまだ半七郎に未練があると思つたんだ。一と思いに殺したが、そうまでするとお藤も怖毛おしげを振つた。お藤は物好きな娘だが、何と言つても若くしてお転婆てんぼなだけだ、——火事ツと聞いて、夢中で飛出して家へ歸つたが、さすがに専助の脅かしが利いているから怖こわくて、親父にも打明ける気になれなかつた——どうだ、こんな事じゃないか」

恐ろしい明察、そう聞くと何の疑いも残りません。

「赤い痣あざは？」

「専助の悪く賢いところだ、『俺の縄張は荒さない』と言つたのを按摩あんまから聞くと、業腹ごうはらでたまらないから、あんな芝居を打つたが、俺に疑いをかけるようなことをすると却かえつて危いと思ひ、赤い膏藥などを使つてこの平次の疑いを一度解き、後で半七郎を殺した時、わざと膏藥こうやくを落して、痣あざが偽物だと判らせたのは、この平次にかかる疑いを二重にも三重にもする術てだつたんだよ」

「悪い奴だね、親分」

「悪い奴だが、——こんなに怨まれて見ると、岡っ引も罪が深いな」

「あんま按摩は？」

「今頃は逃げ出したろう、放つて置け、あれは唯の目付けだ。運が悪きやア、万七兄あにい哥か清吉にでも捕まるだろう」

平次は本当に悲しそうでした。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

赤い痣

初出―「オール讀物」昭和十年四月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第二卷 河出書房 昭和三十一年五月三十一日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>